

第25回恵那市歴史的風致維持向上計画協議会 会議要旨

日時：令和5年11月1日（水曜日） 11：00 ～ 12：00

場所：岩村コミュニティセンター大会議室

公開又は非公開の別 公開

出席者

出村嘉史会長、後藤俊彦副会長、森川彰夫委員、佐藤吉松委員、石井伸吾委員、
長谷川公盛委員

欠席者

長谷川良夫委員、鈴木繁生委員、高井哲也委員、鈴木幸宣委員

傍聴者 1名

1. 開会 (11:00)

2. あいさつ

3. 議事

恵那市歴史的風致維持向上計画と令和6年度事業について

・資料1 第25回恵那市歴史的風致維持向上計画協議会資料

資料に基づき事務局から説明

◆歴史的風致維持向上計画の位置づけ及び課題・基本方針について

【出村会長】

恵那市歴史的風致維持向上計画の位置づけについて、様々な計画に関連していくという話があったが、この中でも特に大事なものは総合計画だと思う。総合計画の基本目標が7つあとしていて、**「3. 町の魅力を高める、4. 便利に暮らす、7. まちを元気にする」**が恵那市歴史的風致維持向上計画協議会に関係すると挙げている。

これは結構大事な話で、何を目指すかというところにすごく関連していく。例えば、今の話**「3番、4番、7番」**が重要と捉えたとすれば、ある程度は予想がつく。町の魅力を高める。つまり、見た目を良くするということ。外から来た人が、「ここに魅力があるな」ということに気づいてもらうということがまず1つあり、その中にいる人たちが、快適に過ごしたいということ。伝建地区も絡んでくるため、ターゲットにした古い時代をそのまま再現して生活はできないので、「今の生活もちゃんと大事ですよ」ということ。7番目は、そういうことを生かして、町が元気でなければならない。つまり観光を中心にして、町で暮らす人が良くなるようにしたいという動機に思える。

一方で、私にはまだ疑問がある。**「5. いきいきと暮らす、6. みんなでまちをつくる」**こそ、大事ではないかと思う。特に、「いきいきと暮らす」というのは、「恵那の住民たちが、そこでの暮らしに満足しているということですよ」という話である。また、「みんなでまちをつくる」というのは、住民・納税者も減っていき日本全体の人口が減っていく中で、建設あるいは整備に対するお金を補助金に頼るという構図が崩れ始めている。そのため補助金を減額してだけでなく、行政サービスの範囲も狭められていく時代に来ている。その中で、「みんなでまちをつくる」というのは、住民たちの動機によってまちを運営するということになる。

この6番が明確に計画の中に入っていないが、歌舞伎や掃除を考えると実は該当している。そういうところが位置づけられてない。その中で事業だけが挙がっているので、不思議

議な感じがする。その辺を整理できたらと思う。

【佐藤委員】

今日、私は大井町地域まちづくり検討会の役員という扱いで参加している。その中で、これからを位置付けてまちを作っていく、あるいは、20 年、30 年先を見据えた計画について検討しているが、その中でも 1 番懸念されている「人口減少を少しでも補えないだろうか。」を重点的に検討している。地元で子どもを育てると、大都市の高校、大学に行ったあと、帰ってこないケースが非常に多い。大学を卒業したら地元に戻ってきてもらえる環境を作りたい。

そのために、企業誘致などを目指していく構想があり、それについて準備段階である。スマートインター誘致の決定など、いろんなことで少しでも住みやすい環境を作りたい。

それから、人口減少がどうして起きるといって、やはり子どもたちの世代は、非常に人口が多い。それが卒業し、高校・大学に行くと、その世代の人口が大都会に流出してしまうこと非常に残念でならない。みんなで努力し子育てをして、そういう中で子どもたちが帰ってきて、おじいちゃん、おばあちゃんの近くで生活してほしい。

「みんなでまちをつくる」という意味では、そういったことが今後この町が生き残るためにどういう努力するかということ、やはりそこに尽きると思う。今、大井町東地域では、将来に向けたまちづくりを進めていこうということをやっている。

今、その辺が非常に大きな課題で、町を作るための基盤を作るために努力をしている。やはり本当に自然が豊かで、その魅力を発揮したまちづくりが必要と私は考えている。

【出村会長】

人口減少は仕方がない現象ではあるが、出ていったまま戻らないということは、この先が思いやられるという強い思いだと思う。戻ってきてもらうということは、20 代で外に出て、20 代後半から 30 代住みやすいということになる。つまり、ターゲットが明瞭化してくる。20 代、30 代に住みやすい環境を整えなければならない。それが歴史的風致であればこそ、その歴史観っていうものがどう心地よく生活を支えるかというところを、この計画は支えないといけないという意見。やはり「5 番、6 番」はとても大事だと思う。

つまり、総合計画の基本目標全てが歴史的風致維持向上計画の中に含まれていると捉え直していいと思う。

それを認めたくらうで、9 ページ目では課題というのを事務局は考えて、この 3 つを挙げている。空き家問題、市民の意識問題、知らせる・表示の方法の問題は全て納得がいく。しかし、課題を検討するときの考え方があって、今上がる課題を挙げ、この課題を整理して目の前にあるストレスや困難というものを課題の形に変えて解決したいと思う。この計画の課題は普通の課題解決の方法だが、「その枠組みをもう少し探しませんか。」ということを言いたい。バックキャストっていう考え方がある。つまり、理想の状態を描い

た上で現状を観察し、「理想に至るために何をすべきか」を考える方法。

バックキャスト思考では、例えば、将来、出ていった人たちが帰ってきて、それぞれ仕事を持ってまちの中で営む状態であるという理想の状態を描いている。そのためには、何をしたら良いのかという課題。バックキャスト思考は、時代の変わり目に必ずやらないといけない方法である。一方のフォーキャストというのはその逆で、定めた目的に対してちゃんと行くための方法を積み上げるという慣れ親しんだ方法であるが、バックキャストという考え方は、その方向がもしかしたら崩れ去るかもしれないというとき、例えば大きな人口減少とかでそういう時に、そこに行きやすい可能性がある理想の状態を定めて、何が足りないという風に考える。

そうすると、例えば、資料館施設の特色に関する話は「目的が違ったら本当はいらなかもかもしれない」ということになる。今の資料館に関することは十分で、例えば「資料を耕して自分で探索したいという人にしてみれば、資料が整っているのは嫌」となってしまう。むしろ、資料が保存している状態であり、それに対して探索できるようにするというのが大事になってくる。そうすると、それを宣伝するよりも本当はもっとやるべきことがあるのではないかという可能性が出てくる。

この議論は今日で終わる必要がないと思う。例えば、1・2回議論を重ねていくうえで、「本当はこういう社会にしたいよねとか、ここだからこそいい暮らしができるという話とか、ここだからこそ蓄積された歴史の諸相があって、そういうものにいつも触れられる」ような、至る社会の妄想をちゃんとすべきと思う。

もしかしたら、この委員会の範疇ではないかもしれない。頼るところは総合計画なるが、そういう意味で7つの基本目標は、かなり抽象度が高いためどちらにでもいける。そういう意味で、歴史的価値を活かすとしたときのライフスタイルみたいなものをどうしたらいいかという議論が本当は欲しいと思っていた。その意味で佐藤委員の意見は1つの重要な指針だと思う。

9ページを見て、「この課題を疑わなくて大丈夫ですか」というところについて意見を聞きたい。

【森川委員】

地元の中学校で、年に1、2回総合学習の時間に「岩村の自然」というコースを作って、岩村のまちを子どもたちと歩いて周って、「岩村にはこういうところがある」ということを教えている。今までは三森山などの山に子どもたちを連れて行っていたが、今年初めて天正疎水の場所に子ども達を連れて行った。

振興事務所や観光協会にある資料を子どもたちに渡して、天正疎水がなぜできたかや現在どこを通っているかを見せた。歴史的風致向上のためには、皆さんに現状を知ってもらうことが大事だと思う。歴史的風致維持向上計画の課題のところにあるように、「市民の

意識の啓発活動」は、将来、子どもたちが戻ってきて何とかしてくれるとも思っているが、今の段階では、例えば天正疎水は今どうなっているかというようなことを子どもたちに知らせることが大事だと思う。一般の方にも、そのような現在の状況を知ってもらおうと市民意識は向上するのではないか。

【出村会長】

ここにしかないものを見るということは、普通の生活では無いということ伝えると後で響くと思う。「子どもの時に見たあれは何だろう」と思って、外に行くと無いものだから。東京で大学生活を送った時に、こんなの無いということで、地元に戻ってきた時に感動する。ある意味次元爆弾で、これは大変重要。そういう意味で伝え方はすごく重要で、現地で先生と一緒に歩き感動を伝える。例えば、熱海の温泉街が減びようとしていたときに若手が移住してきて、そこにしかないものを探し探し当てていた。そこでは、「熱海のことをなんでも知っているおじさん」だった。その人に連れて行ってもらってツアーをするということをやると、まちの見方が変わる。そういうことを小さくやり始めていたら、移住者が増え熱海が日本の中でも屈指の移住者率の高いところになっている。熱海の奇跡って言われている1つの観光の方法がある。

発掘・発見ということは、実は力になると思う。それを歴史的風致維持向上計画に当てはめると、基本方針の中には無いということになる。しかし、それを当てはめれば必ずあるはず。

伝統文化担い手の育成とかだと少し異なる。伝統文化の担い手は必要だが、そこに価値を発見する作用が欲しい。いわゆる宝を発見する作用は、散々やってきたかもしれない。例えば歌舞伎の話では「ただ維持するというより、価値をみんなで体験すること」が、もう1歩踏み込んで必要でないかと思う。前回も言ったように、私、岐阜で地歌舞伎に挑戦したが、やってみるとすごく面白い。つまり、発声の仕方や歩き方、姿勢の取り方、すべて初めて経験した。経験することで世界に広がる。

体験にいろんな人を巻き込んでいくことは、維持にも繋がり、新しい文化を作り、作ることに繋がると思う。この議論すごく進めていきたいが、基本方針について今年度はこれで行くみたいなものはあるのか。

【事務局】

基本方針自体が計画書そのものを書いてある。令和2年3月に決定されたもので、すぐに変えるのは難しい。

【出村会長】

今の議論は、次の動きに対しての積み重ねの第1歩だと思う。少し前向きに未来を語る事が、今後できていけば良いと思う。

◆歴史的風致維持向上計画における令和 6 年度事業について

【出村会長】

令和 6 年度事業計画については、歴史的風致維持向上計画の 3 つの基本方針に照らして、議論の中で深みを与えて検討していくということが必要。7 番目が道路美装事業ということで、中山道の位置を明確にする目的がある。これについて委員の意見を聞きたい。

【後藤委員】

道路が綺麗になりすぎると、歴史的な価値を損なうような気がする。できるだけ従来のアスファルト舗装にしたほうが良いと思う。岩村の城下町はカラフルな舗装と電線地中化をしている。便利にはなるが、道路の色だけで随分雰囲気が変わると思う。

【出村会長】

岩村のカラー舗装は最近落ち着いて見えるが、舗装した当時は仰天する色だった。舗装の状況や舗装のデザインはすごく重要だと思う。大井宿のメインのところの舗装を合わせる事業で、普通のアスファルトに色の異なる採石を入れている。統一感という点で、最終的に登るところまで事業として年々やっていると、本当にこのデザインで良かったのかというのはある。舗装のデザインはいつ頃のものか。

【事務局】

道路舗装は、平成 20～24 年頃に電線地中化と合わせて行われたもの。当時、舗装をどのようなデザインにするのかという議論は当然あって、すでに国の史跡になっている中津川市の中山道落合宿がこのように骨材を入れたデザインとなっていた。中津川市がこの舗装デザインなら、大井宿もそれに合わせたデザインにしておけば中津川市と連動したような形で中山道という 1 つの路線になるイメージで検討した。

【出村会長】

中津川はそこから舗装は変えてないか。勝手に変わっているならば問題だが…。ちなみに道路美装化事業はこれが最後か。先を見据えたときに、もしこの舗装が時代遅れのまま続けると、一番時代遅れになる。最初からまた変えていく方法もなくはないが。どういう状況なのか少し補足してほしい。

【事務局】

現時点では、令和 6 年度で終わりという形になる。今後、歴史的風致維持向上計画が第 3 期となったときに、道路美装を検討する可能性は出てくる。

【出村会長】

少し疑問視もあったが、中津川からの延長に合わせて最後まで舗装することで、私は賛同できると思う。他の委員で意見はあるか。

(委員より、「意見なし」の発声)

議事については賛同したということで、総括して、石井委員から意見を聞きたい。

【石井委員】

先ほど出村会長から発言のあったバックキャストについて、それに至るために何をすべきかの議論を引き続きやっていると良い。

4. その他

今後のスケジュールについて

- ・資料1 第25回恵那市歴史的風致維持向上計画協議会資料
資料に基づき事務局から説明

委員からの意見なし。

5. 閉会 (12:00)